県内ワイド

元気よ、届け

日赤県支部・被災地便り

日赤県支部 総務課長
山本裕行さん

使命の新たな活力源に

一通の礼状

手もとに、いただいた一通の礼状がある。われわれ日赤県支部の第十二班医療チームにとって、大切な宝物の一つだ。

差出人は、仙台市で被災し、現在は愛知県岩倉市で暮らす石黒裕美さん(三四)。石黒さんとわれわれが出会ったのは、五月二十八日。福島県国見町の、東北自動車道国見サービスエリアだった。

石黒さんは地震で自宅が半壊し、夫の実家である岩倉市へ引っ越すため家族で移動中。しかし、この日朝から体調が思わしくなかった次男の烈有(れあ)ちゃん(二)が高熱を発し、意識をなくしてけいれんを起こしていた。途方に暮れていたところ、被災地から福井へ戻る途中のわれわれの赤十字マークを見つけ、助けを求めた。

十二班班長の高嶋理(おさむ)医師(四四)＝福井赤十字病院リハビリテーション科部副部長＝や西村智恵子看護師長(五三)らが、手持ちの器具を使って手際良く応急処置。座薬も投与してしばらく様子を見守ると、症状が改善したため、すぐ近くの病院に向かうよう指示して別れた。

礼状は、その一カ月後の六月二十八日、われわれに届けられた。

「わたしどもは、去年三月の末に私の実母を病気で亡くし、ようやく一周忌を迎えられると思っている矢先の大地震。結局、一周忌は五月の初めに延期し、やっとのことで終えて、まさに心機一転、愛知県でという心境でおりました。今思えば、あの日、サービスエリアで先生方に巡り会えた奇跡も、母のおぼしめしだったと思えます」

「被災地はまだまだこれから、いろいろな問題が出てくるのでしょうが、きっと全国の方々の支援をいただきながら復興していくのだと思います。私たち家族もできることを続け、東北のために頑張りたいと思っております。そう思える機会をくださった先生をはじめ看護師の皆さまに、心より感謝を申し上げます」と、感謝の言葉をいただいた。

お兄ちゃん、お姉ちゃんは地元の小学校に転校し、友だちもできてすっかり新生活になじんでいる。烈有ちゃんも、おじいちゃんたちに見守られ病気が再発することもない。家族五人、元気に新しい生活を始めているそうだ。

礼状と一緒に届いた石黒烈有ちゃんの写真＝日赤県支部提供

医療支援を行うことがわれわれの使命。感謝の言葉を求めているわけではない。それでも「ありがとう」の言葉は、私たちに元気を与えてくれる。あの日、福島のサービスエリアで出会った偶然。そこで行ったわれわれの当たり前の行動と、いただいた山ほどの感謝。

礼状の最後に、こんな一文。「おかげさまで、元気に毎日過ごしております息子の写真を同封いたしました。皆さまでごらんいただけたら幸いでございます」。烈有ちゃんのかわいらしい笑顔が、われわれにまた活力をくれた。

礼状にあった連絡先に電話をすると、夫の益巳(ますみ)さん(三八)から「あのの時、先生たちがいてくれなかったら今の生活はどうなっていたかと思う。本当に『ありがとうございました』ありがとうございます。本当にありがとうございました」